

# 南伯の里「ラーモス」

## 来年、移住地開設50周年

来年、移住地開設50周年を迎えるサンパウロ州カタリーナ州フレイ・ロジェリオ市にある「ラーモス移住地」。同移住地は開設当初から温帯果樹栽培を中心に、さまざまな農作物が栽培されてきた。同時に日本村構想や核廃絶を訴える活動など、他の日系移住地からすると珍しい取り組みは、本紙でも度々取り上げてきた。50周年を迎える移住地の状況と今後について、現地へ赴き取材した。(川口裕貴記者)

### ラーモスについて

ラーモス移住地は同地域の農業復興のため、気候に適した温帯果樹栽培の技術を要する日本人を同州・市が日本政府に要望し、1963年に協定が結ばれて開設された州直轄の移住地だ。

標高800〜900メートルの丘陵地帯に位置し、面積1137ヘクタール。50ロッテ(区画)に日本人70%、ブラジル人30%の契約で、開設当初は日本人約20世帯が入植した。

60年代後半、同移住地の名を全伯、日系社会にとどろかせたのが「ネクタリーナ(油桃)」の栽培の成功だ。ブラジルでは

当時珍しがられ、高値で取引されたという。繁盛に伴い入植者も増え、同地への移住者は倍増した。しかし度重なる低温障害や病害虫の蔓延(まんえん)により、わずか10年足らずで伐採を余儀なくされ、さらに出荷先のサンパウロまで距離が遠く、輸送の際に果実が傷むなどネクタリーナをはじめ、果樹栽培農家は困難を極めた。

した移住地の観光地化に力を入れる動きが見られる。

同移住地には「桜公園」が整備され、日系移住地としては最も広いとされる文協が管轄する60ヘクタールの同公園に、山桜やツツジ約3000本が植えられている。また観光物産館「八角堂」が08年に日本政府の草の根無償資金を受け完成し、月に1度日本食の販売を行うなど、各イベントに利用されている。

また、別の動きとして

同地移住者で昨年9月に他界した故・小川和己さん(長崎)が原爆被爆者として、核兵器廃絶を訴えて02年に完成させた「平和の鐘公園」や10年に完成した史料館も存在し、連邦貯蓄銀行から援助を受け建設された史料館は2年で約3000人の来場がある。

今後は「再活性化プロジェクト」として同地の

農業にとどまらず、こう



平和資料館

観光農園化、日本村構想を実現すべく、今後もブラジル、日本両政府とのつながりを重視したい考えだ。特に斉藤準一伯国空軍総司令官とは、斉藤レイ・ロジェリオ間の舗装道路もラーモス移住地

だった時代(99〜03年)から親交がある。クリチババノス空軍空

と同州との良好な関係があつて整備されたのは事実で、日本人が持つ、人付き合いの精神があつてラーモス移住地の今日があるといつても過言ではない。

出稼ぎによる移住者流出など、他の日系移住地と同様の問題を抱えているのは事実だが、どうにかして発展を遂げたいとする移住者の知恵と、底力からなる情熱が取材を通してうかがえた。